

無藤先生からの応答

著書

『「愛と知の循環」としての保育』を
巡っての質疑の会

無藤 隆（白梅学園大学名誉教授）

2026年3月14日

主催 大阪総合保育大学 総合保育研究所

無藤先生への質問の整理

- 【1】 「愛と知の循環」としての保育についての理解 質問 4 個
 - 【2】 「愛と知の循環」としての保育実践 質問 2 個
 - 【3】 保育の実践や思想 質問 6 個
 - 【4】 幼小接続 質問 4 個
 - 【5】 園の風土（保育者の働き方・レジリエンス）・職員研修 質問 5 個
 - 【6】 保護者への理解 質問 3 個
- 質問合計 24個

【1】 「愛と知の循環」としての保育についての理解

1) ご著書の題名を決めた思いと理由、そして、その題名に至るまでの思いや葛藤などをご教示頂けますと幸いです。（認定こども園：対面）

*「愛」という用語を使うためらいはあります。でも、あえてそう言うしかない。それほど重大な問題を幼児教育は扱っている。それを他の人がいる前で覚悟して話し始めたのが2021年です(コロナが収まり始めた頃)。そうやって考えている内に次第に哲学者のアーレント以外の人もその言い方をしていることに気づき始めましたが。そして愛と知はつながる事により幼児教育は成り立ち、さらにそれが相互的に螺旋的に循環することでちゃんとしたものに転換していくということが見えてきました。その中で幼児教育とは(保育とは)ということへの私なりの確信のある答え方になったのです

なお今回の単著と共に次の本を参照してください。（無藤 隆・矢藤誠慈郎・伊藤理絵「ときがたり 無藤 隆の「愛と知の循環」」中央法規）

2) 「4.保育は難しい、だから専門的なのである」p.313、助けになることがあるの4つ目の項目「手立てとして自覚的に用いることと共に経験を通してのスキルの成立に頼ることだ」に関し、もう少し詳しくお聞かせいただきたいです。（大学教員：Zoom）

*手立てとスキルと似たような意味ではありますが、この場合、あるやり方として用いることを意識して行うことと、経験を通していわば体が動くようにして、そうしようと思うにしてもそのすること自体は自ずと動くということの双方の幅の中で保育の実践は起こるだろうということです。

3) 「愛と知の循環」において、幼児の自発的遊びを支援する教師は、知の知識幅を広げる学びの機会が重要とされるが、養成課程及び各園での、科学的思考を持たせていくためには、どのような取り組みが必要であろうか、ご教示いただきたいと思います。（保育園：Zoom）

*乳幼児でも科学への芽生えは起こります。正確には、事物の面白さとそれが反復できることに気づき、その仕組みを探ろうとするところに科学性の始まりがあります。そこでの科学性はいわば森羅万象あらゆるところに出てきており、それが環境が多様であることや関わり的重要性の意義でもあります。保育者は科学の専門家ではないので、正確に科学的知見を知っている必要はありませんが、事実即してその仕組みのあることを不思議に思い、それを探っていこうとする姿勢を常に持って、子どもと共に考えていけばよいのです。

なお、科学的な知識というときに、その科学性の確かさには幅があるので、それを理解する必要があります。言い換えればあまりに断定的な科学の証拠の提示はゆるめに受け止めて吟味することです。とはいえ、相当に根拠の強い知見も特に医療系のことでは増えてきてい

るので、信頼の置ける科学的ベースの幅広い知見を探する必要があります。同時に、それが園での実践のどこに反映されるべきかも検討する必要があります。その細部が重要なので、必要なら手順を明確にしておき、訓練も必要ですが、もっと緩やかに実践に生かすということであれば、それは同僚同士での議論を経て、ある程度理由が分かって自分たちとして実践を変えていくことを経由すると応用が利くものになります。

4) 「愛と知の循環」という概念は、保育の専門性を関係的に捉える重要な視点だと感じております。そこでお伺いしたいのですが、保育者養成の中で、この「愛」と「知」の循環を育てていくためには、どのような学びや経験が重要になるとお考えでしょうか。先生のお考えをお聞かせいただけますと幸いです。(大学教員：対面)

*それをまさに本書で論じてきていますが、その始まりは、子どものしていることの発見や工夫の面白さを見出し、まずそこに保育者が面白がることだと思います。この世界の不思議さを感じるころから保育は始まります。そのための「練習」はいろいろと日頃から意識すればできます。どんなところにもふとした面白さや不思議さや美しさを見つけられるからです。

【2】 「愛と知の循環」としての保育実践

1) 探究的な学びに関わって、幼児が言葉、特に「もの」とセットの言葉が幼児期から小学校へと切れ目なく学びが繋がっていくカギとなる。ということについて、幼児の言語化と保育者の言語化というところをお聞きできると嬉しいです。(幼稚園：Zoom)

*言語化は本書では簡単には論じています(特に第20章の第1節)。一つは活動の場での子どものつぶやきの驚きや発見や工夫の表れを言葉として反復し、確認することです。もう一つはサークルタイム(みんなの時間)でクラスなどで集まるときにそれぞれの遊びを実物や再演示とともに言葉で提示することです。その工夫や難しさを示し、互いの意見の交換へと向けて行きます。それは言葉が体験とそこでのものへの関わりに根差して提示され、それがその後次第に子どもたちの遊びの工夫や発見が園の文化の中に組み入れられ継承され、発展していきます。

2) 現代は幼少期からデジタルデバイスに触れる機会が増えていますが、画面越しの体験は、先生の提唱される『身体を伴う愛と知の循環』にどのような影響を与えるとお考えでしょうか。これからの時代、私たちが特に意識して守るべき『知のあり方』があれば教えてください。(幼稚園：Zoom)

*この問題はあまりに変化が激しいので難しいのですが、基本は実物の世界とデジタルの世界をつなぐことを頻繁に行い、両者のいりまじりの活動へと進めることだと思います。(いずれ論文を書きたいと思いますが。) デジタルと本物が体験的につながり対応することを種々確認し、またその発展としての製作活動や空想(ごっこ見立て)活動を増やしていきます。

【3】 保育の実践や思想

1) 日本の幼児教育と学校教育のシステムについて、特に幼児期から低学年の教育システムについて、無藤先生が理想とされるのはどのような形ですか？(大学院生：対面)

*私は理想を考えることはあまりしませんが、現実的に可能なところで考えたいですが、それだけでも10年は掛かるでしょう。両者が同一になる必要はないと思います。年長の教育は乳幼児期全体の教育の一部であり、1年生の教育は小学校全体の一部であるからです。基

本は幼児期の学びの芽生えを多様に広げ、そのかなりのものを1年生その他の授業単元で生かし、その探究的なあり方を増し、同時にそこでの学びの確かめを行い、スキルの練習を意味あるようにしつつ行います。(私の架け橋の議論を見てください。)

2) 子育て環境も教育現場も変容している中、乳幼児期の子どもたちにとって不易に大切にしてきたこと、していくことについて様々な視点からお話をお聞きしたいです。(行政：対面)

*不易を本書で語ろうとしています。それが子どもが世界を愛すること、そして世界を知の広がりとして感じることでありますが。それには園環境への関わりが子どもの発見や工夫がよく表れること、環境での多様なあり方、その環境の再構造化を保育者と子どもが共になって行うこと、などが肝心です。

3) まだまだ行事に追われた保育を行っている園がたくさんあると思います。どうしたら遊び中心の保育に変えていけるのでしょうか。(大学院生：対面)

*行事と日頃の保育活動のつながりを付けていくことが必要です。行事のための練習自体というより、その日頃の遊びの面白さを行事中の活動へと子どもと一緒に考えて考え転換していきます。行事は子どもと保育者と共に保護者が参加し、子どもの成長を共に喜び祝福する場となります。それが園に行き渡る子どもの成長の場として喜びを感じさせます。行事とは日頃の子どもの遊びを発展させ、見る人たちにもその面白さを感じるようにするための仕掛けです。その遊びの立ち上がりとどの子どものその子なりの工夫の中で普段以上の力を新たにその場で産み出すことに共に立ち会います。

4) 各要領・指針について。それぞれの要領や指針の捉え方に違いがあるのか。それぞれの施設形態で大切にすべき点について、お聞きしたいです。(子育て広場：対面)

*要領・指針について基本的な考え方は同一になります。それは特に2017年の改訂で明確にされましたし、これからの改訂でさらに強められるでしょう。ただし、幼稚園では学校教育としての「教育課程」という名称のカリキュラムを持ちますが、それは保育所では保育課程(現在は全体的な計画の中にある)と呼ばれます。また保育指針は当然乳児保育(3歳未満児保育)の記述を含めますが、それは3歳以上の連続性が強調されます。養護面は保育所で特に重要ですが、とって幼稚園でも(用語は違いますが)確保されるべきことです。特に指針において用語面をいわば子どもの生命活動のいわば主体的なあり方とそこへの援助として捉えるならば、そこでもより近接したものになります。さらに保育所は(認定こども園のように)地域の幼い子どもがいる家庭への支援を担う各種の活動をすることが期待され、それは幼稚園以上に使命が多様になります。それも今後幼児教育・保育全体においてインクルーシブな方向が強化されるにつれて近接していくと思われま。

5) 無藤先生から、教育保育の行政に携わっている方々や小児科の先生方に、これだけは、今、これからの時代に、伝えたい、伝えておかなければ、ということ、どのようなことでしょうか。また、日本の乳幼児教育保育について、海外に誇れることは、どのようなことだとお考えになりますでしょうか？(幼稚園：Zoom)

*乳幼児期(から小学校低学年くらい)は人間の基礎ができる時期であり、それには園での幼児教育は欠かせない使命を担うようになりました。それは小学校への準備を含みつつ、もっと広く多種多様な「力」「姿勢」を養い、例えば、リテラシーや科学の芽生えや運動能力や思考力と共に協同性、創造性、想像性、民主主義的態度、美的センス等々の芽生えを育て

るところであることが分かってきています。

日本の顕著な特徴はその環境を通しての教育のあり方であり、環境に子どもが関わり、その環境を再構成化していくところを保育者と共に実施することや、子どもの主体的な関わりを元にそれを集団としてのあり方へと拡張し文化的な活動につなぐところであろうと思います。（詳細は東洋大学紀要のUchida・Koga・Mutoの論文を見てください。福祉社会デザイン学研究 2 p.117-143 (2024)）。

6) 先生は、「教科の見方、考え方を教科の捉え方をどう現実世界の問題解決へと適応するかという視点であり、知識群を問題解決の道具として捉えること」が、デューイ的とFacebookに記されていました。①それは戦後からデューイの教育思想は、現代に至るまで小学校や幼児教育に引き継がれているということでしょうか？②日本における幼児教育へのデューイ思想の受容について、倉橋が語られますが、デューイの教育思想と中教審の審議とのつながりなど、無藤先生とお考えを教えてくださいませんか。（大学院生：Zoom)

*デューイに代表されるプラグマティズムの思想はデューイやジェイムズ又その後の思想家たちの著作を通して日本の教育界に大正期以降深く影響を与えています。現在の学習指導要領等の考え方(特に2017年の中教審答申)では引用をしていませんが、その影響は明らかです。「見方・考え方」といった整理に一番よく表れています。デューイと倉橋のつながりのことは私は正確には知りませんが、おそらく倉橋はかなり読み込んだはずですが(直接には会っていないようですが)。2017年の改訂での幼児教育における資質・能力、10の姿、保育内容の関係などはプラグマティズム的だと私は理解しています。その関わりと活動の重視、世界としての内容の把握、そこでの生き方につながるどころや、過程としての捉え方や姿の提起などです。(もちろん日本の保育の伝統を踏まえていますし、レッジョ・エミリアの影響もあります。他の思想家の影響のこともあり、そう明記していませんが、私の単著で論じました。)

なお、プラグマティズムの思想の中核は知が働く場は社会実践の中にあるのだということであり、それら故に、常に誤りうるものでありそれを修正していくものであること、言い換えれば確固たる「本質」を見出しそこから演繹して知を見出すことはできないこと、日常の実践での知と科学の知は連続的であること、事実と価値は相互に入れ込み支え合い改訂されていくこと、というあたりはほぼ共通していると言えます。

【4】 幼小接続

1) 円滑な幼小接続のために、小学校側にどう働きかければ良いのでしょうか？小学校は忙しいことを理由に、幼小接続の大切さをなかなか理解してもらえません。（大学教員：Zoom)

*次の本を参照してください。無藤・古賀松香・岸野麻衣・吉永安里（共編著）「これからの幼保小の架け橋プログラム 越境する実践、溶け合い高め合う専門性」明石書店（3月末刊行）

2) 自治体で幼小接続に取り組んでいます。学びを意識した保育の実施と幼児期な学びを生かした授業改善とでは、無藤先生の感覚ではその理解度はどちらの方が進んでいますか。架け橋コーディネーターですが、小学校のふところに入りたく、多方面からタイミングをねらうも感触が良くありません。（自治体：架け橋担当者）

*小学校に関わるには架け橋の考え方ではスタート・カリキュラムを超えて、1年生全体の教科の教育を単元レベルで変えていく必要があります。生活科を幼児教育の発展として明確にします。国語・算数等々の教科をその単元について幼児期の芽生えを提示して、それにより単元計画を変えることを説得的に示します。幼児期の学びの成果を幅広く芽生えとして整理して提示します。

3) 行政(小学校籍)の立場で幼保小接続を推進しております。2点質問があります。(幼児教育センター長:対面)

1点目:学習指導要領総則の【4学校段階等間の接続】において、「『幼児期の終わりまでに育みたい10の姿』を手掛かりに幼稚園の教師等と子供の成長を共有することを通して」と記載があります。「10の姿を手掛かりに」ということについて、教えていただけますでしょうか。「10の姿を手掛かりに」というのは、幼児が成長を見せた具体的な言動を交流するのでしょうか、それとも、例えば10の姿の「健康な心と体」の項目などが幼児の言動から見られたということを交流するのでしょうか、

2点目:小学校側では、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善が行われていますが、小学校との円滑な接続という意味において、幼児教育施設側も「主体的・対話的で深い学び」へと繋がる保育が展開される必要があるということなのでしょうか。

*幼児期の学びの芽生えを10個の姿に応じて整理し、それをいくつもの具体的なこととして見えるようにします。資質・能力は小学校では学びと授業への参加の姿勢につながります。どの教科の単元にしてもそれに応じた具体的な姿が幼児期にあることを示します。小学校の学習指導要領や教科書などにあるところを幼児期の芽生えとのつながりで分析して明らかにします。

幼児教育において主体的・対話的で深い学びを目指しますが、それは幼児期なりの芽生えを広く展開することを意味します。どんなことにも幼児期にその始まりがあることを具体的に示し、しかも多くの場面でそれが連動していくことを示します。それは幼児教育側にすべき課題が多くあることを示唆しています。

幼児期の知への芽生え(愛と知の循環)が小学校での知の世界への探究へと発展することを意識して保育者同士、子どもたち、保護者たちに伝えます。

【5】 園の風土(保育者の働き方・レジリエンス)・職員研修

1) 幼稚園から認定こども園になり、教職員は時間に追われる日々です。この様な中で、リーダーとしての役割や教職員との繋がりを、どの様に構築して行けば良いでしょうか。(大学院生:対面)

*働き方改革が必須です。残業に終われないこと、事務の効率化の中で毎日少しの時間でもノンコンタクトタイムをそれぞれの職員で可能にします(15分とか)。多少の立ち話を含めて、子どもの様子を語りあうこと、担任が作成する(極めて簡単な)記録とそれを見合うことを可能にします。月に1回とか長目の園内研修を行う時間を作ります。その上でつながりとはどの保育者が初任であろうと自分の考えや思いを発言する場があるところから生まれます。その中で園としての理念を具体化していきます。

2) 子どもの姿を語り合うことを通して園の風土や文化が醸成されていくことが大切だとは感じているが、そのような風土や文化が育っている園には、どのような特徴や共通点があると思われますか。(大学院生:対面)

*子どものすることをそれがはみ出して困ったと思っても同時に面白がり、その子どもの思いを生かしたいと感じるところです。それらの保育上の保育者の思いや工夫が次第に共有され、園の文化を醸成していきます。園の環境や園の日課を変えることを厭いません。必要なら試して見よう、無理なら変えていこうという開かれた姿勢が園長以下全員にあります。他の園を見に行き、また外からの助言者を招きます。

3) 保育者にとって実践を重ねながら成長していく上で、困難な経験を乗り越え適応していく力のレジリエンスが重要な要素だと考えているが、そのレジリエンスを高めたり、発揮したりする上でどのような要素が必要か。個人と組織の両面からお考えをお聞かせいただきたい。(大学院生：対面)

*次の本を参照してください。(無藤 隆【監修】/大方 美香/佐久間 路子【編著】「心の発達と「レジリエンス」の育て方-子どもと保育の柔軟なあり方を目指して」ぎょうせい) 個人・組織の試行錯誤を大きく認めていきます。悩みを共有し、それが個人の失敗と捉えず、大事な気付きがあることとして理解します。大変だけれど面白い、しんどいけれど充実している、互いに支え合っていこうという風土を育てます。誰もが多少ともリーダーでもあり、自分の保育と園の保育の理念との対話を引き受けます。自分が保育者としてやってみたい思いを語ります。疲れたら休めます。また出てきたら元気にやっていくのです。

4) 私は現在、園長を務めております。弊園では職員が安心して戻ってこられる環境づくりに注力した結果、離職者がほぼおらず、次年度にかけて計7名もの職員が産休・育休に入る予定です。復帰率が高いことは嬉しい一方で、現場を支えてきたベテラン層が一度に7名不在となり、4年目や中途採用の若手中心の体制で新年度を迎えることとなります。無藤先生が提唱される「愛と知の循環」において、子どもにとっての「安全な基地」である保育者がこれほど大きく入れ替わる過渡期に、子どもの情緒的な安定を保ちつつ、その探究心を損なわないために、組織として最も配慮すべきことは何でしょうか。経験の浅いチームが、子ども一人ひとりの「知」の芽生えを丁寧に見守る余裕を保つために、園長としてどのような優先順位で現場を導くべきか、ぜひご教示いただけますと幸いです。(保育園：Zoom)

*新しい保育者に交代することを丁寧に子どもに伝え、交代の様子を正直に示し、いつ戻ってくるかを伝えます。大人同士が仲がよいと分かると子どもが安心できます。保育における安心とは、保育者とともに、いつもの遊びができること、いつもの場所があり、いつものものが使えることでもあります。遊びだしたらそれを支え、そこでの子どものわずかな工夫や気付きをとりだし、認め、他の子どもに広げ、また発展のための手立てをものを出しヒントを提供して手伝います。不安定な様子の子どものために早めに気づき、保育者集団として配慮し、必要なら園長や主任がそこに手伝いに入り、協働して進めます。一人の保育者の責任にしないことが重要です。

【6】 保護者への理解

1) 乳幼児期に対する理解を保護者とどのように共有して周知を図っていくかについてお聞きしたいです。(大学教員：Zoom)

*日々の保育の様子を写真・動画・エピソードで伝える。その保護者のお子さんのものを週に1回は含めます。それらの解説を2行程度で示す。その独自の特徴とそこからの学び。さらに、幼児期の遊びからの学びについて時たま解説を行います。特に育成している多種多様な学びの芽生えを整理して示します。それらのかなりが小学校の低学年につながることを教科

別に整理して伝えるとともに、学びへの姿勢を育てていることを強調します。幼児期の幅広い学びの芽生えが学びの楽しさと子ども自らが学びへと展開できることの重要性を具体的に語ります。

2) 幼児教育の重要性を発信しようと努めていますが、未就園児の保護者にとって、入園の決め手は、給食、習い事がついているか、制服が素敵かなどです。もっと保育内容の良さから選んでもらうためのアドバイスをいただきたいです。(公立幼稚園：対面)

*給食も習い事も制服も大事です。正確には食べること、文化的活動へと広げること、服装・ファッションの楽しさです。それらが特別な活動としてできないとしても、園の遊びの活動として広げることができます。例えば、楽器や歌やダンスの遊び、英語に限らず多分化への接触と理解、文字・数量を含む活動を多種多様に展開することやそのできない子どもへの助力、運動遊びを体の多様な動きへの広げること、ファッション遊び(いろいろな服装を楽しむこと)、食事の遊びや本当の料理活動、等々。

もちろん、幼児期の学びとして大事な種々の学びの芽生えが多く日々起きていることを発信し、解説します。さらにそれを園の保護者と共に地域の人へと理解を広げる場を作ります。園訪問を歓迎し、例えばその園を希望しているかではなく、親子がともに遊べる機会を用意します。

3) 最近、愛着障害のように見受けられるこどもが数名あります。どのような対応、助言がよろしいのでしょうか。そのこどもの状況をお話ししますが、保護者様(母親)には、なかなか伝わりにくい事もあります。(認定こども園：Zoom)

*愛着障害かどうかの診断は園の仕事ではありません。それは他に任せて、子どもの難しさに園での対応を考え、園での遊びへのその子どもなりの参加の機会を支えていきます。それを通して保護者の信頼を得ていくことが本来的です。家庭での対応を求めることなく、必要なら家庭での親子の様子を傾聴し、それを受入れ、共感すること(それはそれを全て容認するというのではなく)が始まりです。多くの親は既に否定的な経験を多くして、外からの注意や助言に対して警戒的です。自己否定されるからです。そこを解きほぐすことが始まりです。かなり困難なケースは専門家をお願いするように日頃から連携を図りつなぐことも必要です。

□ 無藤 隆氏

【プロフィール】

白梅学園大学名誉教授

一般社団法人保育教諭養成課程研究会／一般社団法人 日本乳幼児教育・保育者養成学会 理事長

【主な著書】

『協同するからだとことば』(金子書房, 1997年)

『学問と実践のふれあうところ』(新曜社, 2007年)

『幼児教育の原則』(ミネルヴァ書房, 2009年)

『幼児教育のデザイン』(東京大学出版会, 2013年)

『「愛と知の循環」としての保育実践：多様で豊かな世界と出会い,学び,育つ』(北大路出版, 2025年)

『ときがたり 無藤隆の「愛と知の循環」』(中央法規,2025年)

『「愛と知の循環」としての保育：世界を愛することを学ぶ』(北大路出版, 2025年) 他多数

